名作への招待

第五集　復活等10篇

浅原六朗著

名作への招待　V

1957.1.25　第1刷　発行　　©　〒130

著　者　浅原六朗
発行者　森脇将光
印刷者　渡辺一郎
東京都千代田区西神田2の11・中外印刷

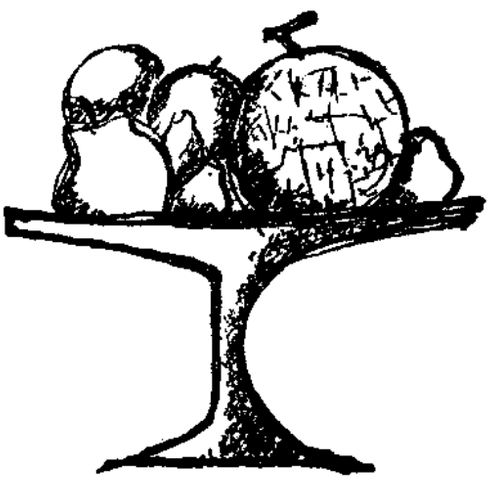
発行所　東京日本橋・室町
電　話(24)1111～5
振替　東京38556番
株式会社　森脇文庫

乱丁・落丁の際はお取換えいたします。

名作への招待

V

浅原六朗著



森脇文庫

はしがき

世界の名作といわれる文学作品にとりくんで、僕は八年を経過した。毎月、名作といわれる長篇を精続し、やがて原作の味をいかしつゝ、その構成をこわさずに独立した文学作品としてダイジェストすることに苦労した。

『婦人生活』に、この作品は毎月連載され、今や八年を経過したわけである。雑誌社の企画が、こんなに永くつゞいたのは珍らしいといわれている。同誌の人たちの理解によること、もちろんであるが、更に多くの読者によって、この作品が支持され、期待されたことに原因があったわけである。そうでなくってはこう永くはつゞけられない。

現代人はまことに繁忙である。とても世界の名作、長篇を一つ一つ読んでおられるものではない。しかし読みたい、その作品の味を識りたいという希求はある。私は、そういう人たちの気持になりかわって、なるべく原作に忠実に、しかも単なる筋書や説明でない、生きた味を四五十枚に省略してつたえようと苦心したわけである。

ある人は、こんな映えない仕事をするよりも、自分の小説をもつと書いた方がよくないかと云ってくれた。私は昭和廿七年、中央公論に小説『憑依』を発表した以後、この仕事だけに力を注いできた。つまらない小説を書くよりも意義ありと認めたからである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

非常な長篇になると、読むだけで廿日も、一カ月もかかった。決して間にあわせの仕事ではない。日本の読書界においても、こういうじみな仕事に、相当の時間と良心をそそいで、読者のために仕上げる作家が一人ぐらいあってもいいと想ったからである。

英文学をひもとくと、チャールス・ラムが、シェークスピアの劇作を『シェークスピア物語』として書いたことで有名であるが、私はそれにまけない自負をもって、この『名作への招待』を百万人の読者におくる。

一九五七年新春

著　者

目次

嵐ケ丘　エミリ・ブロンテ……七
カルメン　メリメ……三三
即興詩人　アンデルセン……五五
奇妙な幕間狂言　ユージン・オニール……八一
紅はこべ　オルツイ夫人……一〇五
シラノ・ド・ベルジュラック　エドモン・ロスタン……一三一
田園交響楽　アンドレ・ジイド……一五七
カストロの尼　スタンダール……一八五
復活　レフ・トルストイ……二〇五
イノック・アーデン　アルフレッド・テニスン……二三一

嵐ケ丘

原作・エミリ・ブロンテ

『嵐ケ丘』について

「ジェーン・エア」で有名なシャーロット・ブロンテの妹、エミリー・ブロンテ（一八一八―一八四八）は、イギリスの女流小説家、詩人として、するどい感受性、つよい意志、冷静きわまりない理性で、荒々しい自然の描写を背景にした、愛憎に生きる魂の描出に、おそろしいまでの迫力を示しています。

このような手法で書かれた、彼女の唯一の小説「嵐ケ丘」（一八四七）は、浪漫主義とリアリズムを一種の神秘で統一した名作といわれています。

復讐の鬼と化したヒースクリフは、キャサリンとの恋に破れ、恋敵エドガーの妹を妻にして〝嵐ケ丘〟の主となり、財産をうばい、愛も魂も荒涼として、冷たい嵐の吹きすさぶ中を執念を残して死んでゆく。

物語は、その後この家を訪れる旅人に、下女が物語る形式をとっていますが、三代にわたる執念の恐ろしさを描き、現実と空想を神秘で貫いた波瀾の散文詩といえましょう。

ブロンテは肺を病みながら、医者の診察をこばみ病床につくこともなく、三十才の若さでこの世を去っています。

氷のように冷たい手

そのころ孤独をこのみ、人嫌いになっていた私は、イギリスでもまったく世間ばなれのした遠い田舎にきて、建物の相当に立派な、荘園といってもいゝ邸をかりて、しばらく住むことにした。

景色のよいところだったが、人家はまったくまばらであった。この家には年老いた女が一人すんでいて、家の管理をしながら、なにもかも、私の世話をしてくれることになった。この邸の持主はこゝから四哩ほどはなれた、丘の上の一軒家にすんでいた。ワザリング・ハイツ、一般にそこの家のことを〝嵐ケ丘〟と呼んで、ヒスクリフという人が、そこの家の主人であった。その邸は、丘の上にあるだけに、北風がつよく吹きあたり、家の端にある樅の木はすべて南にねじまがり、傾斜していた。

ヒスクリフという人は、陰気な、そして精悍な顔をした人で、こんな孤独の家に住みながら、しかも徹底した人嫌いらしく、貸家のことでわずかにたずねた私のような訪問客をも、一向に歓迎しない風であった。

この嵐ケ丘の家には、主人のヒスクリフのほかに、若い、ひどく美しい女と、雇人ともつかないこれも顔立の立派な、粗野な感じのする青年とがいた。それ以外はすべて雇人らしかった。主人が無愛想で、その影響をうけたのか、男も女も、みんな私にむかって突けん貪だった。

人嫌いな気分で、暫く田舎に静養しようと考えている私にとって、歓迎されるよりも、歓迎されない方がいいようなものであった。が、それでもこの嵐ケ丘の人たちは、私には奇異に、いや、むしろ奇怪な感じにうけとれた。到底、人並ではない印象なのだ。

ある日の午後、私はもう一度すこしの用件があって、嵐ケ丘の家をたずねて行った。私は馬にものらず四哩の野原をあるいて行ったのだが、嵐ケ丘の邸についた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ころ、雪がふんぷんとふりだしてきていた。何匹もの犬が、私をとりかこんで吠えたてる。私は泳ぐようにしてこの犬の包囲をひきずりながら、ようやく家の中にむかえられた。

主人のヒスクリフと、話がすんでかえろうとしたが雪はすごい勢いでふりだしてきて、もう夕闇もせまってきている。しばらく模様を見たが、雪の勢いはおとろえそうもない。泊めてくれと言ったが、主人のヒスクリフはひどく渋い顔をしている。やむを得ず雇人の提灯をうばうように借りて雪のなかにでた私は、雇人がけしかけた犬のために吠えつかれ、雪のなかに引き倒されて、身動きさえできなくなってしまった。

あの若い美しい女と、家の者にたすけられて再びもどった私は、ようやく主人ヒスクリフの許可で、二階の一部屋に泊ることを許された。

蠟燭をもって案内した女中は、

「この部屋は、今までたびたび変なことがあるので、扉(ドア)には鍵をかけ放しで、誰も泊めたことがないんですよ」

と、説明した。

しかし、私にとっては吹雪の野原にまよって、凍えて死ぬより、まだましなので、家具や、大きな寝台のそろっているこの部屋に案内されたことで満足した。

凍えたからだを黴(かび)くさい寝台によこたえたが、なかなか眠れない。

窓ぎわには数冊の本がかさねられたまゝになっており、窓ぶちのペンキには、キャスリン・アンショウとか、キャスリン・ヒスクリフとか名前の落書が、大小さまざまにかゝれてあった。

眼をつぶって、しばらくすると、私は気持のわるい夢をみて眼がさめた。

外はまだひどい吹雪らしく、樅(もみ)の枝が硝子戸にふれて、はげしい音をたてゝいる。それがいかにもうるさいので、窓をあけてその枝を抑えようとした途端、私

は縦の枝をつかまず、硝子戸の穴からあべこべに、なにか冷めたい小さな指で、自分の手をつかまえられてしまった。手をひきぬこうとするが、ぎゅっと握った氷のような指は私の腕をはなさない。

「入れてください。いれてください」

氷のような小さな手は弱い声でいう。

「誰れ？」

と訊くと、

「わたしはキャスリン・リントンです。わたし家にかえってきたの。今まで沢でまよっていたんです」

その指は、万力のようにしっかりしがみついて離れないので、私は気狂いのように恐ろしくなった。

「入れることができないじゃないか、入れてもらいたいなら、この指をはなしておくれ」

すると、指はその握りをゆるめたので、私は慌てて硝子窓の穴からひっこめて、その穴を、本を積みかさねて塞いでしまった。

「二十年です。二十年ちかく私は宿なしでしたの」

外で、窓穴を気味わるくがりがりと掻きはじめている。積みかさねた本は前のめりになってきた。恐怖のため、私が呻り声をあげたとき、この家の主人ヒスクリフが蠟燭をもって入ってきたので、私はようやく救われた。

ヒスクリフは、私がこの部屋に案内されて寝たのを初めて知ったらしく、それが女中のジラーだとわかるとひどく怒った。

しかし、私がこの部屋で恐ろしい目にあった話をすると、彼は急に蠟燭を手にもったまゝ入りこみ、格子戸をねじあけて、私がそばにいるのもわすれたような激情にあふれ、涙をながして戸外にむかって叫んだ。

「キャスリンはいれ。はいっておいで。もう一度はいっておいで。私の本当に可愛いもの、どんなにお前を私はまっていることか」

切実な情にあふれた声で、ヒスクリフの両眼には、

涙がながれてきている。私はこゝの家の主人のとつぜんの変化に二度びっくりした。冷酷な表情をして、いつもむっつりとしているこの男から、こんなやさしい恋人にでもさゝやくような声のでることが不思議におもえた。そして奇怪な窓のそとの恐ろしい者を、心から愛して招び入れようとしていることが、私にとってはまったく了解しがたかった。

二人はやがてこの部屋をでて、階下のあかるい居間にもどってきたが、ヒスクリフの顔は、またもや以前の陰気な、人をよせつけない顔にかえって、あの部屋の妖しいできごとについては、一言も私に口をきかせなかった。

あかるくなってから、私はヒスクリフに案内されて雪の沢原にでて、中途から一人自分の借りた家にもどることができた。

ディーン夫人の物語

ある日、私はこの家つきの女中兼管理人のディーン夫人に、ふとあの奇怪な嵐ケ丘のふるい館と、そこにすむ人たちのことをたずねてみた。ディーン夫人は、ずっと若いころから嵐ケ丘の館に小間使としてはたらいていたことがあるので、あの館を中心におこった不思議な因縁をみんな知っていた。

夫人からきかされた話は、この世のものとは思われないほど、強くはげしい恋愛に憑かれた男女と、それにからまる憎しみの物語といってよかった。

あなたが、お逢いになってきたヒスクリフという人は、あの館の御先祖からの血をひいた人ではございません。

実はあそこの、今はとっくの昔にお亡くなりになったアンショウという大旦那さまが、リバプールという遠いところに御旅行になったとき、道ばたから犬でもひろうように拾ってきた子供が、今のヒスクリフなのでございます。

私はその時のことをよく覚えておりますが、垢だらけで真黒い人好きのしない子供で、奥さまはとんだ物を拾ってきたと、とても厭がりましたが、大旦那さまはどういうわけか、いつもその子に目をかけてやったようでございました。

アンショウ家には、ヒンドリという十四の坊ちゃんと、キャスリンという七つになるお嬢さまがございました。ヒンドリお坊ちゃんはヒスクリフと名づけた黒ん坊のようなその子を、たいへん嫌がりましたが、キャスリンお嬢さまは、自分とあまり年のちがわないヒスクリフを自分の遊び相手にしてとても仲よしになりました。

陰気で、我慢づよくみえる子で、悪い境遇のなかで虐待されて無感覚になっていたのでございましょう。ヒンドリ坊ちゃんに打たれても聴きもせず、涙もこぼさないような子でございました。そういう子供でしたが、キャスリンお嬢さまは、その子のどういうところが気に入ったのか、形に影がそうように、二人はいつも一緒にあそび歩いているのでございます。沢原でヒイスの花をむしったり、野兎を追いかけたり、お嬢さまは綺麗でしたけれど、ヒスクリフにまけないほどあばれん坊でございました。こうして二人がどんなに仲よしであろうと、そのことで特にこの二人のことを注意するものとてはありませんでした。

長男のヒンドリ坊ちゃんは間もなく上級の学校に行くため、家をお出になり、五六年たって奥さまが亡くなり、やがてヒスクリフを拾ってきた大旦那さまもお亡くなりになりました。

このときお嬢さまが、

「お父さまが死んでしまった。ヒスクリフ、お父さまが死んでしまった」

と、ヒスクリフの肩にすがりながら泣きだすと、ヒスクリフも一緒に火のように泣きだしたのを、私はよく覚えています。ヒスクリフにとっても、ただ一人、

目をかけてくだすった大旦那さまがお亡くなりになったのですから、殆んど泣いたことのない子の心も、悲しかったのでございましょう。

ヒンドリさまは、お葬式のためにかえってきましたが、驚いたことに若い奥さまをとつぜん連れていらしったことでございます。それまでヒスクリフは家の者として待遇されておりましたが、この若奥さまがヒスクリフを嫌いだと仰言ってから、ヒンドリは急に彼を召使の位置に追いおとして、朝から晩まで畑ではたらかせるようにしてしまいました。すると、キャスリンは自分の勉強がすむと、畑にでていってヒスクリフに本を教えたり、そのまゝ沢原のむこうにある岩山に一緒にでかけて行ってしまったりするのです。兄弟でもこうはゆかないと思うほど、二人はいつも一緒にいて離れないのです。

ある日曜日の夕がた、二人は悪戯がすぎて、若旦那のヒンドリに居間を追いたてられると、二人はそろってどこかにいなくなってしまいました。夕飯どきに捜しまわったが、どこにもいません。そとには雨がふっています。もう帰ってきても二人は絶対に家のなかに入れるなと言って、若主人は寝てしまいました。私としては寝られるどころではありません。すると、夜おそくなって、ヒスクリスだけが雨にぬれてかえってきました。

「お嬢さまは？」

と訊くと、

「グレンジのリントンさんの所にいるよ。僕は泊めてもらえなかった」

というのです。グレンジのリントンさまのお邸というのは、今あなたさまのいらっしゃるこのお邸のことですが、あの二人は、嵐ケ丘からこのリントンさんの邸まで歩いてきて、塀をのりこえて、明るい家のなかを覗きこんだのです。すると犬に吠えられ、逃げようとしたところお嬢さんは犬に足を噛みつかれ、リント

ンさんの家中の者が大騒ぎになり、お嬢さんは家中の者に看病されて、リントンさんのところに泊っているというのです。

それまで嵐ケ丘のアンショウ家と、このグレンジのリントンさんの家とは特に交際はなかったのですが、このことが始まりで両家はつき合うようになり、リントンさんの長男のエドガーさんも、ここに遊びにくるようになりました。そのころエドガーさんは、キャスリンより三つ四つ年上だったと思いますが、あとで考えますと、ほんの一寸したことが、人間の深い因縁をつくってゆくものでございますね。

エドガーさんは良家にそだった子供らしく、上品で、顔だちも立派で、全く野放しにされているヒスクリフなどとは、くらべものにはならない子供さんでした。

何年かの時間がすぎさりました。

キャスリンは年ごろの美しい娘になり、エドガーは誰がみても立派な紳士としてあつかわれるようになった頃、ヒスクリフときては、陽にやけて、野良仕事をして、陰気で、頑固な気質まるだしで、野蛮人のようでもありました。

エドガーがいつもキャスリンをたずねてくることは、ヒスクリフにとって愉快なことではない。ヒスクリフは一度慍(おこ)って、エドガーに皿をなげつけたことがありました。ヒスクリフはエドガーが嫌いで、嫌いでならないのです。このことは当然エドガーの方にも反映して、ヒスクリフを嫌い、軽蔑もしていました。キャスリンは、エドガーに若い女として当然のような好意をもちながら、ヒスクリフにたいしては、子供のときからと同じようにふかく結びついていました。私はそのむすびつきを、男女のあいだの愛情だと考えたことは一度もありませんでしたけれど、同じ根からはえてきた、二本の木のように一つの生命で、はなれられないものじゃないかと考えたことはありました。ヒスクリフも、青年になるにつれ、陰気な眉のたて皺は消え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com